

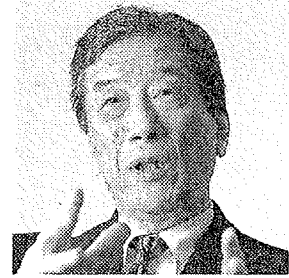
世界の環境問題は、人類の進歩に起因している。産業革命から科学と技術、公衆衛生が格段に進んだ。これまでは環境や資源の制約を考慮せず、大量生産・廃棄で大きな問題はないように見えたが、明らかに限界を迎えている。環境、エネルギー、気候変動が地球規模の共通の課題で、世界が知恵を絞って、次世代にどう引き継ぐかが問われている。

日本がすべきことは、強みをいかし、それをしっかりと経済成長につなげる一方で、弱みを自覚することだ。

多くの日本人は、日本の強みは「省エネ技術」や「ものづくり」と答える。太陽光、クリーンで環境に優しく無駄の少ない製造技術……。個別の技術は確かに素晴らしいし、もったいないものを、と追求する力が強い。それを深めることは大切だ。だが、世界ではそれだけで通用しない。

例えば携帯電話。世界市場で大きなシェアを誇るのはフィンランドや韓国など海外メーカーばかり。日本はものづくり国家といっても売れていない。ところが、実は海外製品の部品の多くは日本製。日本は「下請け」なのだ。

## 心つかむ「ものがたり」を



くろかわ・きよし  
1936年生まれ。東京大学名誉教授（医学博士、内科学）。科学技術政策にも精通、日本学術会議会長や内閣府総合科学技術会議議員、内閣特別顧問を歴任した。06年から現職。

海水淡水化などの膜分離技術も日本は世界シェアの6割を占めるが、水ビジネス全体では1割すらない。

なぜ、そうなのか。日本は、優れた「ものづくり」をしているが、世界の多様な価値観を持つ人たちの心をつかみ、揺さぶる「ものがたり」を構想し、推進する力が欠けている。相手を考えずに技術はいいといっても、横に広がらない。日本の技術に、「ものがたり」を載せて世界に新たな価値を打ち出す必要がある。

重要なのは、政治が国家ビジョンという大きな旗をしっかりと立てることだ。なぜできないかを考えるより、どうやればできるかと発想を変え、すばやく行動へ踏み出す。そうすれば、「日本はやっぱりすごいな」「日本に教わりたい」と世界からいわれるようになるはずだ。